2

氏　名	宮内　悠輔（みやうち　ゆうすけ）
学位の種類	博士（政治学）
報告番号	乙第３６２号
学位授与年月日	2022 年 9 月 19 日
学位授与の要件	学位規則(昭和２８年４月１日文部省令第９号) 第４条第２項該当
学位論文題目	ベルギー地域主義政党の政策選択――ヴォルクスユニ、フラームス・ブロック／ベラング、スピリット、新フランデレン同盟を中心的事例として
審査委員	（主査）小川　有美（立教大学大学院法学研究科教授） 川崎　修（立教大学大学院法学研究科教授） 原田　久（立教大学大学院法学研究科教授） 松尾　秀哉（龍谷大学法学部教授）

Ⅰ．論文の内容の要旨

（１）論文の構成

はじめに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
1
第一章 地域主義政党をめぐる概念の定義・・・・・・・・・ ・・・・・・・・・6
第一節 概念の定義Ⅰ—地域主義 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・6
第一項 「地域」を定義する ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・6
第二項 「地域主義」を定義する ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・7
第三項 地域主義・分離主義・離脱主義 ・・・・・・・・・・・・・・・・・9
第四項 ナショナリズムやエスニック・アイデンティティとの関係・・・・11
第二節 概念の定義Ⅱ—地域主義政党 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・14

第二章 先行研究と分析手法・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・24
第一節 中心的な検討事例の概要と分析手法 ・・・・・・・・・・・・・・・24
第一項 戦前ベルギー政党政治史・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・24
第二項 戦後ベルギー政党政治史①—対立の激化と分権化の進行・・・・26
第三項 戦後ベルギー政党政治史②—ベルギーの主要政党・概略・・・・27
第二節 先行研究①—欧米デモクラシーを俯瞰する視点からの考察 ・・・31
第一項 EU 要因論・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・31
第二項 隙間政党論・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・32
第三節 先行研究②—ベルギーの政治状況に着目した考察 ・・・・・・・34
第一項 「連邦制の逆説」論・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・34
第二項 多極共存型デモクラシー論・・・・・・・・・・・・・・・・・・・35
第四節 本稿の立場と分析手法 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・38

第三章 地域主義政党間の競合状況下における政策の硬直
—ヴォルクスユニの事例 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・40
第一節 事例の概要と分析の手がかり ・・・・・・・・・・・・・・・・・・40
第一項 問題の所在・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・40
第二項 手がかりとしての「ウェッジ・イシュー 」・・・・・・・・・・41
第三項 分析の手法と意図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・42
第二節 1990 年代後半における政党「ヴォルクスユニ」の政策・・・・・・43
第一項 前史—結党から 90 年代まで・・・・・・・・・・・・・・・・・・43
第二項 パトリック・ヴァンクルンケルスヴェン党首期・・・・・・・・・46
第三項 ヘルト・ブルジョワ党首期・・・・・・・・・・・・・・・・・・51

第四項 同時期のフラームス・ブロックの状況・・・・・・・・・・・・・・・53
（1）結党までの歴史的経緯 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・53
（2）政策の特徴と変遷 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・54
第三節 本章の結論 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・56

第四章 領域的要求と移民争点の関係—「スピリット」の事例・・・・・・57
第一節 現代の先進デモクラシーにおける左右イデオロギー ・・・・・・・57
第二節 地域主義政党と移民争点の関係に関する先行研究 ・・・・・・・・58
第三節 政党「スピリット」の事例 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・60
第一項 政党の立ち上げと選挙連合の成功—2003 年連邦選挙まで ・・・61
第二項 低迷と連合解消、そして政党消滅へ
—2007 年連邦選挙とそれ以降・・・・・・・・・・・・・・・・・62
第四節 本章の結論 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・64

第五章 ポピュリズムを用いた地域主義政党の政策転換
—新フランデレン同盟の事例 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・66
第一節 問題の背景 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・66
第一項 アイデンティティ・ポリティクスとベルギー・・・・・・・・・・・66
第二項 新フランデレン同盟をめぐる研究・・・・・・・・・・・・・・・・67
（1）N-VA とポピュリズムにまつわる議論 ・・・・・・・・・・・・・・・67
（2）地域アイデンティティとポピュリズム ・・・・・・・・・・・・・・・69
第二節 各党の政策比較 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・72
第1項 分析対象期間に至るまでの経緯
—N-VA 最初の連邦選挙まで（2001-03）・・・・・・・・・・・・72
第二項 政策比較①—2007 年選挙まで ・・・・・・・・・・・・・・・・・74
（1）新フランデレン同盟 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
75
（2）フラームス・ベラング ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
76
（3）キリスト教民主フランデレン党 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・
78
（4）開かれたフランデレン自由民主党 ・・・・・・・・・・・・・・・・・
80
（5）相違社会党 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
81
第三項 政策比較②—2010 年選挙まで ・・・・・・・・・・・・・・・・・81

（1）新フランデレン同盟 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・83
（2）フラームス・ベラング ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・85
（3）キリスト教民主フランデレン党 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・87
（4）開かれたフランデレン自由民主党 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・89
（5）相違社会党 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・90
第三節 本章および本稿の結論 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・91
第一項 本章の結論・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・91
第二項 本稿の結論・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・94
おわりに ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・97

補論 地域主義政党の主流化・全国政党化—カナダ改革党の事例・・・・・100
第一節 分析枠組み・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・100
第一項 問題の所在・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・100
第二項 事例の選定・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・101
第二節 「カナダ改革党」の事例分析・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・101
第一項 結党までの歴史的経緯・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・101
第二項 政策の特徴と変遷・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・104
第三節 本章の結論・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・107

備考・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・109
参考：戦後ベルギーにおける各政党の国政議席獲得数・・・・・・・・・・110
参考文献・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・114

図表類

表 1 西欧・北米・日本の地域主義政党の一覧（戦後～2021.7）・・・・・・16
表 2 レジス・ダンドワによるエスノ地域主義政党の類型・・・・・・・・・・23
表 3 2022 年現在のベルギーの主要政党・・・・・・・・・・・・・・・・・・31
表 4 カナダの主要政党（1988-2000 年）・・・・・・・・・・・・・・・・・102

表 5-1 戦後ベルギーにおける各政党の国政議席獲得数
（主流政党・エコロジー政党）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・110
表 5-2 戦後ベルギーにおける各政党の国政議席獲得数
（急進右派・地域主義・その他）・・・・・・・・・・・・・・・・・・112
図 1 ベルギーの地域圏・共同体・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・25
図 2 ヴォルクスユニとフラームス・ブロックの国政下院選挙における議席数
の変遷（1999 年連邦選挙まで）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・43
図 3 N-VA とフラームス・ブロック／ベラングの連邦下院選挙における議席数
の変遷（2003 年以降）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・72
図 4 カナダの政党の連邦下院議席数変遷（1988-2000 年）・・・・・・・105

（2）論文の内容要旨

本論文は、地域主義政党が政策を転換する要因、ひいては、地域主義政党として活動しようとする動機について、ベルギーを中心的に検討したものである。

エコロジストや右派ポピュリストといった新興政党の動向は、現代ヨーロッパ政治研究において大きな関心を集めてきた。これに対して地域主義政党は、各国で無視できない規模で活動してきたにもかかわらず、専門的な研究者を除いては注目を集めにくい存在であった。だが、昨今のデモクラシー諸国では、2010 年に地域主義政党「新フランデレン同盟」（N-VA）が連邦議会の第一党となったベルギーや、地域主義政党「スコットランド国民党」が 2014 年総選挙において主流政党の一角である自由民主党を獲得議席数で大きく上回ったイギリスなどの事例が広く注目を集めている。

だがそもそも根本的に、なぜ地域主義政党という政党類型が成立し、また活動しうるのか。この点を検討するにあたり、本論文が分析対象とするベルギーは格好の事例である。たとえば、1970 年代に設立された「フラームス・ブロック」（VB）は、「フラームス・ベラング」（前身政党と区別せず VB と表記する）と党名を改めた 2022 年現在も、ベルギーにおける有力な地域主義政党の 1 つとなっている。さらに注目すべき現象としては、2010 年以降の地域主義政党、新フランデレン同盟 N-VA の躍進が挙げられる。同党は、2010 年以降、2022 年現在に至るまで、連邦議会の第一党に位置し続けている。地域主義政党でありながら国政を揺るがす影響力を発揮する N-VA の政策とその変遷を検討することは、地域主義政党研究全体にも大きな意義を与えるものとなる。

この問題関心の下に、第一章でまず分析の前提として必要となる概念の整理を行った。地域主義政党とは、政党の目標として領域的要求を訴え、その目標を達成するために全国レベルへも影響力を発揮しようとする政党のことである。単純に政治活動の拠点として特定の地域を指定する政党ということであれば、地域政党とみなすのが適当となる。また、地域主義政党の主張は文化保護から地域の分離独立まで非常に幅広い。

第二章では地域主義政党に関する先行研究を俯瞰し、本論文の分析手法を説明した。地域主義政党は、欧州統合や「隙間政党」論のように広くヨーロッパのデモクラシー諸国で成立する枠組み、あるいは連邦制や多極共存型デモクラシーといった、よりベルギーの特色に着目するような枠組みから分析されうるものであった。しかし、そのどれもが地域主義政党の選挙市場における成功や、政策転換の有無を論ずるに留まってきた。そもそも、なぜ地域主義政党などという政党類型が成立しうるのか、既存の研究では明らかでなかった。

そこで、本論文では隙間政党(niche party)論を部分的に利用しつつも、地域主義政党の政策変遷の経路を分析する。一般に、地域主義政党が支持拡大のために政策を変容させるにあたって 2 つの道が存在する。すなわち、一方では反移民・排外主義化、他方では地域争点の放棄・後景化である。前者は地域主義と同様のロジックを用いながら反移民政党へと転換する道であり、後者は、地域主義政党であること自体をやめる道となる。しかし、N-VA はそうではない、別の政策変遷を試みたと本論文では論じている。すなわち N-VA とは、政治アリーナにおいて自党が地域主義政党であること、それ自体に意味を見出した政党なのである。

以上の検討を事例に基づいて確かめるため、本論文では定性的手法によって地域主義政党の政策変容（あるいは非変容）を追跡し、地域主義政党が地域主義政党として活動する動機・要因の導出を目指している。

第三章では、ベルギーの地域主義政党 VU を分析した。主に 1990 年代後半を分析対象期間とし、VU の政党機関紙を用いて同党の政策変遷を検討した。この章の分析から、1990 年代後半の VU は基本的には反移民の姿勢を採らなかったものの、その姿勢にはやや揺らぎがみえたことが分かった。この章では、VB の掲げる反移民争点が他党の政党綱領を分裂させる「ウェッジ・イシュー」として機能したために、VU は排外主義への路線変更を行えなかったものと結論付けた。

第四章では、2000 年代にベルギーで活動していた、VU の分裂左派スピリットを事例とした。スピリットは、当初は社会民主主義的争点を重視し、フランデレンの社会主義政党「相違社会党」（SP.A）と選挙連合を組んだ。同党は活動初期の時点では地域争点をそれほど強調せず、かつ移民に好意的な姿勢を示

していた。しかし、党勢の低迷と党首の後退に伴い、移民への態度を硬化し、さらに地域争点を前面に押し出すようになっていく。最終的に、SP.A との連合は解消され、幾度かの党名変更を経てスピリットは消滅することとなった。この章では、フランデレンにおける地域主義は、移民に懐疑的な姿勢を示す「右派的」な政策方針へと政党を引き付ける傾向を持つとの結論に至った。

第五章では、VB および主流政党との比較から N-VA の政策を検討した。マニフェストを用いた言説分析から、VB が一貫して移民やワロニー地域（フランス語圏・話者）を攻撃対象としており、既成勢力を敵とみなす「反エリート主義」の立場を採っていたことが分かった。これに対し、移民に対する N-VA の姿勢は曖昧なものであった。また同党は、フランス語系を中心とする主流政党に対しても、主に地域の権利に関わる国家の制度について全面的要求をしつつも、対話の余地を残す姿勢を示している。これを本論文では、反移民を訴えずに領域的要求でポピュリズムを展開する戦略・イデオロギーであり、またその対エスタブリッシュメント戦略を「間エリート主義」だと結論付ける。本概念は申請者による独自の概念であり、N-VA は排外主義化や地域争点の後景化ではなく、特有のポピュリズムによって政策の独自性を確立しようと試みた。

最後に、それまでのすべての章の検討・分析結果を踏まえ、地域主義政党が地域主義政党として活動する動機・誘因を「地域主義が隙間争点であり、かつ伝統的亀裂構造にも位置する政治争点にあたる」点に求めた。主流政党にとっては、特定地域からの集票をねらうなら地域政党化するだけで十分である。しかし同時に、領域的要求には地域政党が「隙間」として活動するのに十分な影響力が存在する。加えて、地域主義という政策争点の可変性は、時代や状況にあった政策提言を可能にするものでもあった。特に、特有のポピュリズムで地域争点への訴求を試みた N-VA の事例は、政党研究でも稀にみる、地域主義政党の成功例である。また本論文の分析から、ベルギーの多極共存型デモクラシー自体が、協調するエリート集団、エリートの協調を糾弾するアウトサイダーとしての右派ポピュリスト、そしてその両者の対立構造を利用して地域の「真の」代表者になろうとする地域ポピュリスト、という三者の対立軸へと変容しつつあることも示唆された。

Ⅱ．論文審査の結果の要旨

（１）論文の特徴

この論文の特色および学術的意義として、特に以下の諸点を示す。

本論文は、戦後ベルギー政治における主要な地域主義政党の系譜を、特に複数の政党が共存した時代の政策転換ないし転換できなかった点に注目し、量的ではなく質的に分析を試みた独自性に富む研究であり、少なくとも VU から N-VA に至る系譜の政治史的分析を質的に試みたものは本邦で類をみない。また、海外においても（「多極共存型デモクラシー」の紹介や、その一面を観察した論文は少なからずみられるが）「多極共存型」の中で「生き残り」の戦略を通時比較的に試みたものはなく、その意味で学術的貢献度の高い論文と評価できる。

本論文冒頭の第一章・第二章では、関連する政党概念の網羅的な再検討を行い、これまでのポピュリズム政党論、「隙間政党」論等によって正確に分析できなかった地域主義政党について最適な概念の再構成を追求している。その綿密すぎるほどに思われる作業は、学問的な誠実さを示すとともに、今まで残余的に扱われていた地域の視点を取り入れ、政党分類の体系的な再検討を促す意味もある。そのことは、イギリス、スペイン、イタリアなど典型的な連邦国家ではないヨーロッパ諸国、さらには日本においても地域主義的現象が政治を揺るがしている今日、政治学的な貢献の一つに数えられよう。

また本論文の魅力は、ベルギーの地域主義政党を一定の概念・定義により平板にとらえることに終始せず、ダイナミックな変容を緻密に跡付けて、生き生きした政党史研究を提供していることである。ただし政党史といっても単なる通時的叙述ではなく、多国間の類似の政党の共時的な比較に代えて、ベルギー内で時代ごとに現れた地域主義政党の通時的な比較という、ユニークな手法が採られている。

そこではフラームス・ブロック／ベラングや N-VA のみならず、これまで考察対象となることが稀であった前身的な地域主義政党（ヴォルクスユニやスピリット）についても同水準の本格的な分析が与えられているばかりでなく、それらの政策転換や消長を説明するために説得的な分析モデルが適用されている。とりわけ、VB の台頭を説明した「ウェッジ・イシュー」（くさび争点）の適用や、本論文固有の概念である「間エリート主義」による新党 N-VA の戦略の新奇性の描き出しは、申請者が独創的な概念の使い手であることをうかがわせるものである。

（２）論文の評価

上述のように本論文には特筆すべき独自性や学術的意義が多々存在する一方で、そうした特性を生かして研究を発展させるために、以下の指摘への対応を含めた改善が望まれる。

①本論文が提起した「間エリート主義」という概念については、説明が与えられているものの、その具体的内容が分かりにくい。この点は、ポピュリズムの時代の新しい「多極共存型」を（再）発見した、という見方もありうる。今後の理論的発展が期待される。
②現在の政治学の主流である制度論的アプローチを採らないで省略した点について説明を尽くすべきである。選挙制度や政治資金制度などの基幹的な政治制度、あるいは党首選出や政党内意思決定などの政党内制度が政党の変容に与える影響は少なくないと考えられる。本論文では補論のカナダをはじめ比較研究への展望が示されているが、その際制度的前提が十分提示されるべきである。
③構成上の工夫として、各章ごとに問いを立て、それぞれに適した枠組みで分析を試みられているが、それらの間の連関が必ずしも明らかでなく、全体としての問いが曖昧に映る結果となっている。
④政治学における操作的なケース・スタディは、既存の仮説を検証するために、あるいは既存の仮説では説明できないケースから新仮説を構築するために行われる。しかし本論文はそのどちらともいいにくい。むしろ本論文は、緩やかな連続性をもつ地域主義政党の発展史として再構成してもよいのではないか。
⑤本論文の実証方法として、政党の政策変化というサプライサイド（の質的分析）に専ら光が当てられ、有権者すなわちデマンドサイド（の計量的分析）は研究範囲外におかれているが、後者の既存研究の評価／批判を盛り込んでおくべきではないか。
⑥ベルギー政治研究としては、同国が抱える最大の政治的問題である「言語問題」についての掘り下げが少ない。またベルギーでは政策以外のリンケージ（政党—有権者関係）、とりわけクライエンテリズムの機能（衰退）も影響があったのではないか。その他にも、政党間協定、ドゥトルー事件など、ベルギー政治の変化をもたらした各論的な論点を見逃すべきではない。

総括としては、審査員の一致した感想であるように、研究の完成（刊行）・発展のためには、操作的な比較政治の手法をブラッシュアップさせるのか、政治史としての「厚い」調査を徹底するのか、研究者として選択を迫られるであろうということである。方法論の「隙間」を開拓して独自のスタイルを確立す

ることもまた一つの可能性であるが、それを見出すためにも更なる研鑽と試行錯誤が必要となろう。